



北雷 才商魂士

MESSAGE FROM THE PRESIDENT

写真の書「士魂商才」は武士の精神と商人の才能を兼ね備えていることの意味。

大学、校友会、育友会、 ともに連携することで乗り越えられる。

学校法人専修大学理事長
専修大学長

日高義博

「東日本大震災」で被災された多くの校友やご家族の皆様には、心よりお見舞い申し上げます。

当日、私は生田校舎から神田校舎に移動し、この7階の理事長室に入って10分後、ガァーという音とともに地震に遭いました。台の上のテレビが飛び、机の上の本や資料も全部、吹っ飛びました。本学の創立130年の際に発見された、4人の創立者のお一人、田尻稲次郎先生の書「士魂商才」の額も、壁から1m前後、飛び出すように大きく揺れました。額を落として、壊してはいけないと一生懸命、支えました。それほど必死になったのは、この書が専修大学の原点でもあると考えるからです。

実を言うと私が大きな地震を体験するのは、今回で3回目です。1回目は大学生のときに故郷の宮崎県で経験した「えびの地震」(1968年)で、実家の中にいましたが立って歩けなかったほどです。2回目は1990年か91年だったと思いますが、ドイツに留学しているときで、現地では250年ぶりという大地震に遭遇しました。

専修大学の歴史を振り返ってみると、関東大震災では図書館の外壁1枚を残して全壊しました。第二次世界大戦では焼け野原になりました。そうした厳しい状況乗り越えてきた原動力は、「社会の骨格を担う人材を育てる」という「熱き思い」を卒業生たちが長年にわたって、つないできたからだと思います。今回の大震災では専修大学、被災地の石巻専修大学、ともに厳しい状況にあります。しかし、大学をはじめ校友会や育友会が緊密に連携することで耐えられる、乗り越えられると確信しています。

全国で公開されている映画『学校をつくろう』をご覧になった方は、関東大震災のゴォーというシーンから始まったこ

とを、覚えていらっしゃるでしょう。非常に象徴的であり、その後の専修大学の生き様を示すだけでなく、今回の大震災で被災された学生や卒業生、ご家族、関係者などに対して、この映画はエールにもなると考えています。私は、この映画をつくって良かったと思うと同時に、今回の大震災を逆に成長へのバネにするぞ！という決意をあらたにしています。

これからの日本を展望すると、少子化はますます進行し、大学の本質が問われ、大学のあり方を大きく変えることが求められます。「東日本大震災」を契機に日本全体の経済や社会の立て直し、さらには日本の文化のあり方、どう生きべきかまで問直すことが求められます。いままで、専修大学は大災害や戦争の苦難をバネにして、発展してきました。今回もバネにして成長していきたい。過去の経験から、わが専修大学はそれができると信じています。

私の生まれ故郷は毎年、台風が必ずやってきます。一夜にして家の屋根が飛ばされ、田に植えた稲が流されてしまいます。自然の厳しさ、逆に自然に対する敬意。自然には抵抗できない、自然と共生していかなければならない。そういう風土で育ちましたから、大きな災害が起きてもそれを包み込み、自然と共生していかなければいけないという「思い」があります。日本の自然や文化は、さまざまな困難を乗り越えてきたから、いまの美しさがあると思います。大震災のあとに咲く桜は、普通に咲く桜よりもきれいです。ただ、美しいものには、それを支える厳しい土壌が必ずあります。そうした土壌なくして美しいもの、あるいは成功はありません。この逆境をマイナス思考ではなく、発想を切り替え未来へのバネにすべきだ、と考えています。

(談・6月1日(水) 神田校舎理事長室にて)

学校をつくろう

4人の本学創立者の青春物語『学校をつくろう』全国で上映!

7月30日(土)からフォーラム仙台、8月13日(土)からフォーラム盛岡、8月20日(土)からフォーラム福島にて。